

# 病害虫発生予察情報（7月予報）

平成 28 年 6 月 29 日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち・穂いもち	発生量：やや多 (発病株率 2.0%)	6 月上旬～下旬の葉いもち発生量： 多(+) 気象予報：気温：並～高い(－) 降水量：並～多い(＋)
	紋枯病	発生量：やや多 (発病株率 0.7%)	6 月上旬～下旬発生量： 並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	発生量：少 (発病株率 0.4%)	6 月上旬～下旬の縞葉枯病の発生量： 少(発生なし)(－) 6 月上旬～下旬のヒメトビウンカ 発生量：少(－) 5 月中旬の中遠におけるヒメトビウンカ のウイルス保毒率：やや少(－) 6 月の予察灯誘殺数：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	セジロウンカ	発生量：やや少 (寄生虫数 2.4 頭/株)	6 月上旬～下旬発生量：少(発生なし) (－) 6 月の予察灯誘殺数：少(なし)(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや少 (但し、中遠地域は並)	6 月上旬～下旬発生量：少(－) 6 月の予察灯誘殺数：並～少(－) (但し、中遠地域は多) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：多 (寄生虫数 0.2 頭/m <sup>2</sup> )	6 月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	イモキバガ	発生量：少 (巻葉数 2.7 葉/m <sup>2</sup> )	6 月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	エビガラスズメ	発生量：並 (寄生虫数 0.04 頭/m <sup>2</sup> )	6 月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
チャ	炭疽病	発生量：多 (病葉数 10.7 葉/1.25m <sup>2</sup> )	6 月中下旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並～高い(±) 降水量：並～多い(＋)
	もち病	発生量：多 (病葉数 10.1 葉/1.25m <sup>2</sup> ) 特に、山間地は注意	6 月中下旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並～高い(－) 降水量：並～多い(＋)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	輪斑病	発生量：並 (病葉数 18.1 葉/1.25m <sup>2</sup> )	6月中下旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数 3.2 頭/1.25m <sup>2</sup> ) 発生時期：やや早	6月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：少 (寄生虫数 2.2 頭/1.25m <sup>2</sup> ) 発生時期：やや早	6月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	チャノホソガ	発生量：並 (巻葉数 1.7 葉/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：やや早	6月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (叩き落とし虫数 12.3 頭/4 カ所)	6月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 2.3 頭/4 カ所)	6月中下旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 (寄生株率 6.5%) 発生時期：かなり早	6月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	ヨモギエダシャク	発生量：少 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	6月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(±)
ウンシュウミカン	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (寄生果率 0.3%)	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率 17.7%)	6月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	黒点病	発生量：並 (発病度 0.2)	6月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
中晩柑	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.6)	6月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
キウイフルーツ	かいよう病	発生量：並	6月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～高い(－) 降水量：並～多い(＋)
果樹全般	カメムシ類	発生量：並	越冬量：並(±) かき花飛来量：少(－) 気象予報：気温：並～高い(＋) 降水量：並～多い(－)
キク (露地)	白さび病	発生量：やや少 (発病株率 0.7%)	6月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並～高い(－) 降水量：並～多い(＋)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
キク (露地)	黒斑・褐斑病	発生量：やや多 (発病株率 3.1%)	6月上旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並～高い(+) 降水量：並～多い(+)
	えそ病(トマト黄化えそウイルス：TSWV)	発生量：少 (発病株率 0.1%)	6月上旬発生量： えそ病：少(発生なし)(-) アザミウマ類：少(-) 気象予報：気温：並～高い(+) 降水量：並～多い(-)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (被害株率 12.4%)	6月上旬被害：少(-) 気象予報：気温：並～高い(+) 降水量：並～多い(-)
	オオタバコガ	発生量：並 (被害株率 3.0%)	6月中旬被害：少(なし)(-) 6月の成虫誘殺数：多(+) 気象予報：気温：並～高い(+) 降水量：並～多い(-)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【イネ】

#### <生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：6月9日～21日）では、草丈の県平均値は平年並、茎数は平年よりやや少なく、葉色は平年よりやや薄かった。なお、病害虫防除員の情報によると、生育は地域によってばらつきがあるが平年並からやや早い状況である。なお、田方平坦地、東部高冷地および志太榛原地域については、今年の調査日が例年より早かったため、生育調査の結果を過小評価している可能性がある。

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
草丈 (cm)	18.5 (23.6)	27.1 (34.8)	21.6 (26.0)	28.8 (31.2)	47.7 (49.2)	29.4 (33.2)
茎数 (本)	5.7 (10.2)	12.7 (19.5)	9.8 (12.1)	12.1 (12.9)	23.5 (24.2)	13.2 (15.9)
葉色 (指数1-7)	3.0 (4.2)	4.9 (4.9)	3.3 (4.4)	3.5 (4.4)	4.0 (4.5)	3.8 (4.5)

( )内は平年値

### ●葉いもち・穂いもち

#### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、葉いもちの平均発病株率は1.4%（平年0.6%）と平年より多かった。
- ・置き苗が確認された113ほ場の内、9ほ場で苗いもちの発生が確認された。
- ・1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いが、気温は平年並～高いため、本病の発生を特に助長しない（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

#### 防除対策

- ・置き苗は本田に植え付けた株より早期に葉いもちが発生し、いもち病の伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・梅雨の時期は特に発生しやすい気象条件となるため、上位1～3葉に病斑が見られる場合は適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に急性型病斑（周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」

の項を参照)。

## ●紋枯病

### 予報の根拠

- ・6月上～下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多く、気温は平年並～高いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・常発地では、穂ばらみ期～出穂期に薬剤防除を行う。

## ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

### 予報の根拠

- ・6月上～下旬の巡回調査では、縞葉枯病の発生は確認されなかった（平年0.05%）。
- ・5月中旬の中遠地区でのヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率は4.0%（平年5.2%）と平年よりやや低かった。
- ・本病を媒介するヒメトビウンカの6月中下旬の平均最多寄生数は0.02頭/株（平年0.4頭/株）と平年より少なかった。
- ・6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、ヒメトビウンカの誘殺は平年より少なく推移している。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、ヒメトビウンカの増殖を特に助長しない。

### 防除対策

- ・例年、縞葉枯病が発生する地域ではヒメトビウンカの発生に注意し、特にイネの感受性の高い幼穂形成期頃までを中心に防除を行う。

## ●セジロウンカ

### 予報の根拠

- ・6月上～下旬の巡回調査では、セジロウンカの発生は確認されなかった（平年0.16頭/株）。
- ・6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、セジロウンカの誘殺は確認されていない。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、セジロウンカの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・株元をよく観察し、成幼虫が多寄生する場合やすず病が発生している場合は直ちに薬剤を散布する。

## ●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

### 予報の根拠

- ・6月上～下旬の水田畦畔・雑草地等におけるすくい取り調査では、斑点米カメムシ類の平均捕獲数は16.6頭/30回すくい取り（過去3年間の6月平均捕獲数36.5頭/30回すくい取り）と、過去3年間と比較して少なかった。
- ・6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並～少なく推移している。ただし、磐田市五十子の予察灯ではアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数が多い。

- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、カメムシ類の増殖を助長する。

#### 防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。除草してない水田は早急を実施する。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまう可能性があるため、出穂の10日前までに除草を終了する。
- ・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・穂揃期（成虫侵入期）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと防除効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。

#### <その他の病害虫>

##### ●もみ枯細菌病

#### 防除対策

- ・本病は、発病後の薬剤散布では防除効果が期待できないため、常発地や本年育苗期に発生がみられた場合は必ず防除適期（出穂期前後）に予防散布を行う。
- ・出穂期が台風等の風雨と重なった場合には多発する恐れがあるため、風雨の前か、風雨が収まり次第速やかに、薬剤防除を行う。

##### ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

#### 発生状況

- ・6月上～下旬の巡回調査では、スクミリンゴガイの発生面積率は38%（平年33%）と平年並であった。

#### 防除対策

- ・7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶすか水中に落とす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

#### 【サツマイモ】

#### <生育の概況等>

生育は平年並である。

##### ●ナカジロシタバ

#### 予報の根拠

- ・6月中旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数は1.1頭/m<sup>2</sup>（平年0.5頭）で平年に比べ発生が多かった。
- ・1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いが、本種等大型の幼虫への影響は少なく、気温は平年並～高いため、本種の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・幼虫は齢期が進むと摂食量が急増するため、例年発生するほ場では観察により早期発見に努める。
- ・7月に発生が増加するので、若齢幼虫が多数見られるようであれば薬剤防除を行う。

## ●イモキバガ（イモコガ）

### 予報の根拠

- ・6月中旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は0.3葉/m<sup>2</sup>（平年0.6葉）で平年に比べ発生は少なかった。
- ・病害虫防除員からの発生状況報告によると、発生状況は平年並だった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・例年、葉の繁茂に伴い巻葉数は増加する。多発する場合は防除を行う。

## ●エビガラスズメ

### 予報の根拠

- ・6月中旬に行った巡回調査では発生は確認されなかった（平年0.2頭）。
- ・1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いが、本種等大型の幼虫への影響は少なく、気温は平年並～高いため、本種の発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を行う。

## 【チャ】

### ＜生育の概況等＞

6月中下旬の巡回調査時では、二番茶摘採前～摘採後と摘採時期がばらついていた。中切り更新園が多い。

## ●炭疽病

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉や遅れ芽で11.7葉/1.25m<sup>2</sup>（平年3.5葉/1.25m<sup>2</sup>）の発生が見られ、平年に比べ発生が多かった。一部の茶園で多発していた。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いことから本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨明けまでは感染機会が多くなる。防除は三番茶萌芽期から開葉期に実施し、例年発生が見られる茶園では萌芽期と2～3葉開葉期の2回防除を行う。なお、2回防除を実施する際には、1回目に予防効果の高い剤を使用し、2回目に治療効果の高い剤を使用する。

## ●もち病

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉や二番茶芽で29.4葉/1.25m<sup>2</sup>（平年4.5葉/1.25m<sup>2</sup>）と、平年より多かった。特に、富士山麓地域、静岡市北部地域、川根地域といった中山間地で発生が目立った。
- ・本病は新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いことから、本病の発生を助長する。

## 防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では特に発生しやすい。二番茶期に発生の見られた茶園や山間地の茶園では、三番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。

## ●輪斑病

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、1.7葉/1.25 m<sup>2</sup>（平年2.1葉/1.25 m<sup>2</sup>）の発生が見られ、平年よりやや少なかった。
- ・本病の発病には25℃以上の高い気温が好適である。1ヶ月予報によると、気温は平年並～高いため本病の発生をやや助長する。

## 防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が主な発病部位になるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

## ●チャハマキ、チャノココクモンハマキ

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.02頭/1.25 m<sup>2</sup>（平年0.9頭）、チャノココクモンハマキは0.02頭/1.25 m<sup>2</sup>（平年0.5頭）で平年に比べ発生は少なかった。
- ・6月中下旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップでの成虫誘殺状況では、誘殺数は平年並、発生時期はやや早かった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生時期は早まるが発生量は助長されない。

## 防除対策

- ・両種の平年の第1世代成虫発生盛期は6月下旬から7月上旬で、第2世代幼虫を対象とした防除時期は7月上旬から中旬になる。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

## ●チャノホソガ

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は4.7葉/1.25 m<sup>2</sup>（平年5.8葉）で、平年並であった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生を特に助長しない。

## 防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。例年7月中旬に成虫の発生が多くなるため、三番茶の生育期と重なる茶園では注意が必要である。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。



## ●チャノキイロアザミウマ

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は8.7頭/4カ所(平年19.4頭)と平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・例年、三番茶生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いいため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の萌芽から生育期に防除を実施する。

## ●チャノミドリヒメヨコバイ

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.0頭/4カ所(平年2.4頭)と平年に比べやや多かった。
- ・調査園中に、被害多発園が散見される。現在、更新茶園が多く、再生芽への防除が不十分な場合には、増殖に適する環境となる。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・例年、三番茶生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いいため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

## ●クワシロカイガラムシ

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率は34%(平年61.2%)、平均寄生株率は16.9%(平年24.2%)と平年に比べ低かった。
- ・アメダス平年値の気温データに基づく茶業研究センター(菊川市)の第2世代予想ふ化最盛日は、7月17日と予測されており、1ヶ月予報によると、今後の気温は平年並～高く、第2世代幼虫のふ化時期はかなり早まると予想される。また、降水量は平年並～多く、本種の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察して、適期防除に努める。なお、県内各地のふ化最盛予想日は防除所ホームページで情報提供している。

## ●ヨモギエダシャク

### 予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、叩き落とし虫数は0.06頭/4カ所(平年0.15頭)と少なかった。
- ・5月下旬から6月中旬の茶業研究センター(菊川市)の成虫誘殺数は、平年に比べやや少なかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並～多く、降水量は平年並～多い予想で、本種の発生を助長しない。

## 防除対策

- ・7月に入ると成虫の発生が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

## <その他病害虫>

### ●新梢枯死症

- ・本病は、主に新芽の包葉や不完全葉の離脱した傷口から発症する。包葉や不完全葉の多くは新芽の萌芽期から2～3葉期に離脱するので、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。
- ・昨年発生の多かった茶園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に2回程度防除する。なお、QoI剤（商品名：アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フリントフロアブル25）は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

## 【ウンシュウミカン】

### <生育の概況等>

県内の主要産地における生育は平年より5～7日程度早い。

### ●チャノキイロアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・6月の巡回調査では、県平均寄生果率は0.0%（平年0.5%）で平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年並～高いが、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・アメダスの気象データを用いた有効積算温度の予測では、第3世代成虫の発生ピークは6月第6半旬～7月第1半旬、第4世代成虫の発生ピークは7月第4～5半旬と予想される。各産地における成虫発生時期の予想についてはホームページを参照。
- ・薬剤防除適期は各世代の発生ピークである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・炭酸カルシウム水和剤を6月上旬から7月中に散布すると、被害抑制効果がある。なお、8月以降の散布は収穫時期に白斑が残りやすいため、使用しない。

### ●ミカンハダニ

#### 予報の根拠

- ・6月の巡回調査では、平均寄生葉率は7.9%（平年8.7%）で平年並であった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年並～高いが、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・夏期（7～8月）は天敵（カブリダニ類、ハネカクシ類、テントウムシ類）の発生が多くなるが、ミカンハダニ類が多発している園（寄生葉率が30%を超える園）では薬剤防除を行う。

### ●黒点病

#### 予報の根拠

- ・6月の巡回調査では発病は見られなかった（平年発病度0.01）。

- ・1ヶ月予報では、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによれば、6月中旬に防除を行った園では6月下旬に要防除時期となる。また、6月下旬に防除を行った園では7月上中旬に要防除時期となる（ホームページを参照）。
- ・今後の降水量が増えた場合は要防除時期が早まるため、シミュレーションよりも早めに防除を行う。また、前回の散布から25～30日を過ぎる場合には2回目の散布を行う。

#### <その他病害虫>

##### ●かいよう病

- ・6月の巡回調査では、平均発病度(葉)は0.1（平年0.1）と平年並の発生であった。
- ・ウンシュウミカンは中程度の耐性を持つが、中晩柑と近接している園では感染の恐れがあるため、感染の状況を見て防除を行う。

#### 防除対策

- ・強い風雨により本病の感染が拡大するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

#### 【中晩柑】

##### ●かいよう病

###### 予報の根拠

- ・6月の巡回調査では、葉の平均発病度は0.6（平年0.6）と平年並の発生であった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・強い風雨により本病の感染が拡大するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

#### 【キウイフルーツ】

#### <生育の概況等>

県内の主要産地における生育は平年並～3日程度早い。

##### ●かいよう病

###### 予報の根拠

- ・6月の巡回調査では、発病葉率は2.7%（平年値なし）であった。
- ・発病適温が10℃～20℃のため平均気温が25℃を超える7月は病勢が停滞する
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、発生を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。そのため防除は予防対策が中心となる。

- ・受粉結実後～果実肥大期までにコサイド 3000 を予防散布する。散布にあたっては、薬害軽減のためクレフノンを加用する。
- ・病勢が停滞する 7 月以降も病原細菌は低密度ながら樹体内で生存している。平均気温が 20℃付近まで低下する 9 月下旬～10 月上旬になると再び菌の増殖が活発化するため、初夏までに発病がみられた樹については秋以降の発病に注意し、発病がみられた場合は収穫後にコサイド 3000 を散布する。
- ・管理作業によっても感染するためせん定器具はこまめに消毒用アルコール等で消毒する。
- ・病原細菌は風雨により飛散し傷口から感染する。キウイフルーツは風に弱く傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。
- ・詳細な防除方法については農林水産省の技術情報のページ (<http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryu2/>) のうち、「キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の当面の防除対応マニュアル」、「かいよう病まん延防止パンフレット」等を参考にする。

## 【果樹全般】

### ●カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

#### 予報の根拠

- ・冬季に行った落葉中のチャバネアオカメムシ越冬量調査では、平均越冬成虫は 0.7 頭/m<sup>2</sup> (年平均越冬虫数 0.8 頭/m<sup>2</sup>) と平年並であった。
- ・5 月中下旬に行ったカンキツの花での叩き落とし調査では、平均寄生虫数は 0.7 頭/5 着花枝 (年平均寄生虫数 1.3 頭/5 着花枝) と平年よりも少なかった。
- ・予察灯における 6 月第 1～4 半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは県全体で 107.7 頭/箇所 (平年 64.0 頭/箇所) と平年より多かった。また、ツヤアオカメムシは 62.7 頭/箇所 (平年 73.2 頭/箇所) と平年よりやや少なかった。

#### 防除対策

- ・例年モモ、ビワは収穫期まで被害果が発生する。カンキツ、カキ、ナシ、キウイでは本格的なカメムシの被害は 7 月以降になる。
- ・スギ、ヒノキの近くにある果樹園では、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。
- ・本年のチャバネアオカメムシ越冬数、カンキツ花寄生数、フェロモントラップ・予察灯誘殺数の詳細は病虫害防除所ホームページに掲載している。

## 【キク (露地)】

### <生育の概況等>

生育は平年並である。今年は巡回調査日が例年より早く、定植直後の株を調査したため、病虫害の発生を過小評価している可能性がある。

## ●白さび病

### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 2.6%）。但し、西部地域の病害虫防除員からは、本病の発生が「やや多」との報告があった。
- ・ 1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いが、気温は平年並～高いため、本病の発生を特に助長しない。（本病の発病適温 17℃前後）。

### 防除対策

- ・ 発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

## ●黒斑病、褐斑病

### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 3.1%）。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

### 防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ 土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・ 親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

## ●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、発病は確認されず（平年発病株率 0.1%）、アザミウマ類による被害株率も 1.2%で平年より少なかった（平年 13.8%）。
- ・ 1ヶ月予報では、7月の気温は平年並～高いが、降水量は平年並～多いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類は本ウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

## ●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、本ぽの平均被害株率は1.2%（平年13.8%）と平年より低かった。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、アザミウマ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類はえそ病を媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ えそ病が認められた場合は被害株を速やかに抜き取り処分するとともに、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマの薬剤防除を徹底する。
- ・ 開花期のキクの花は特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

## ●オオタバコガ

### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、被害は確認されなかった（平年被害株率0.1%）。
- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並～高く、降水量は平年並～多いため、オオタバコガの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 例年7月以降に発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

### 3 季節予報

#### (1) 1か月予報 (東海地方 平成28年6月23日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 6月25日から7月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	40	40
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月 : 6月25日(土)～7月24日(日)

1週目 : 6月25日(土)～7月1日(金)

2週目 : 7月2日(土)～7月8日(金)

3～4週目 : 7月9日(土)～7月22日(金)

#### (2) 3か月予報 (東海地方 平成28年6月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月から9月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

7月 期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。

【気温】

3か月			7月			8月			9月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	40	40	20	40	40	20	30	50

【降水量】

3か月			7月			8月			9月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	40	30	30	40	30	30	40	30	40	30	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	7月	8月	9月	7月	8月	9月
浜松	25.7	27.0	24.1	190	151	249
静岡	25.7	27.0	24.1	278	251	292
三島	25.6	26.8	23.6	213	209	243

\*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い (少ない)」「平年並」「高い (多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分 (それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い (少ない) 場合は「平年に比べて多い (少ない)」、また平年の日数と同程度に多い (少ない) 場合には「平年と同様に多い (少ない)」と表現します。なお、単に多い (少ない) と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い (少ない) ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--